

は疑いなく、戦国期を研究する者にとって
は必読の書となろう。

(新書判 二二九頁 一九七八年十二
月教育社 六〇〇円)
(今岡典和 京都大学大学院生)

立花雄一著

『評伝 横山源之助』

―底辺社会・文学・労働運動―

明治中期から後期にかけての社会運動や
文学に関心をもつ人々にとって、横山源之
助(一八七一一一九一五)に何らかの契機
で興味をひかれつつも、源之助の全体像を
構成する困難さにもどかしさをおぼえたこ
とも多かったはずである。しかし、周知の
ように、源之助の諸論稿は初期労働運動・
労資関係研究において、片山潜・高野房太
郎とならんで、数多く分析の対象となつて
おり、まったく源之助が未知の人物であつ
たというわけではなかった。ただ、源之助
の活動領域の多層性にもかかわらず、源之
助評価の軸が「下層社会」の実態調査にの
みおかれていたことに、そのもどかしさの
要因があつたのだと思われる。

本書は、源之助の出生、生活環境、青年

期の挫折、内田魯庵・二葉亭四迷・樋口一
葉・木下尚江との交遊、『毎日新聞』との
関係、「下層社会」の実態調査およびそれ
にもとづいた初期労働運動への積極的参加、
後半生における生活の困窮と諸著作との関
連等の内容からなり、源之助の全生涯と思
想とを「不運な労働運動者の一生」として
うきばりにするものである。そして、本書
は、一人の人間の生涯と思想とを描きだそ
うとするとき、その人間への熱き思いと愛
惜の念は欠くことのできないものであると
感じさせてくれる力作である。この著者な
ればこそ、源之助の作品群の発掘、「労働
組合期成会」・『労働世界』・「大日本労働団
体聯合」との密接な関係等の新たな事実を
明らかにし、さらに、源之助を媒介として
明治期社会思想における空白部分をうめる
問題提起をもおこなうことができたのだと
思われる。

本書における著者のモチーフは、つぎの
ようにまとめることができる。源之助の思
想的発想は、社会の裏面のひとびとと事象
とに共感をもって視点を確立し、そこから
社会構造の変遷をみていこうとするもので
ある。そして、その発想の心情的核は源之

助の出身階層・生活環境に刻印されたもの
である、と。この指摘は、本書において実
体的に明らかにされているがゆえに、源之
助の思想を把握するうえで、多くの示唆を
あたえてくれるすぐれたものになっている
と思われる。

しかし、本書のあとにも、わたしにとつ
ては、源之助が提出した問題とその史的意
義とは何であったのか、という問いは残る。
確かに、本書において明らかにされている
ように、源之助は「下層社会」への先駆的
かつ体系的な実態調査にもとづいた現実意
識をもっていた。ことばをかえれば、源
之助の現実意識は、資本制下における「下
層社会」の日常生活そのものへむけられて
いたということが出来る。とはいへ、その
現実意識を社会構造の分析と改良とへむけ
たとき、源之助の現実意識は安定性を欠い
ていたといわざるをえない。このことは、
『内地雑居後の日本』に現実の経済社会構
成からの乖離として典型的にあらわされて
いるが、以後の著作にも、大なれ小なれ、あ
らわれていることである。源之助がその不
安定さを克服しようとして自ら担いこんだ
課題をわたしなりにひきだすならば、その

課題は、源之助にとつて、資本制下における「下層社会」の日常生活から経済社会をうとうとしてみようちえなかつた挫折感をどのように再構築するかにあつたのだと思われる。このことは、現実的には、つぎのような源之助の軌跡に照応している。すなわち、源之助は、日清戦争後から日露戦争前まで社会的意識を昂揚させて実践的であつたとし、またそうでありえたのであるが、日露戦争後社会的意識を實踐のみならず思想的にも衰弱させざるをえなかつたというような軌跡にある。このような軌跡は、すぐには、当時の社会情況において、一般化できないかもしれない。しかし、源之助における現実意識と社会的意識との分裂を一指標として、当時の社会思想の問題点を明らかにすることができるとすれば、源之助の史的意義はより深く問うことができると思われる。

「横山源之助とは、いったい何者であつたらう。」

この問いは、ようやく評伝を書き終わりたいまなのおこる。」と著者が本書「あとがき」に記しているように、源之助はまだまだ問われるべき人物である。

(A5判 二七八頁 一九七九年四月
創樹社 三五〇〇円)
(立川健治 京都大学大学院生)

Canfield F. Smith

*Volinistok under Red and
White Rule—Revolution
and Counterrevolution
in the Russian Far East
1920-1922*

シベリア戦争(いわゆるシベリア出兵)

の研究は最近になつてようやく本格化した(詳しくは原暉之「日本の極東ロシア軍事干渉の諸問題」『歴史学研究』四七八号参照)。しかしながら、尼港事件から日本軍撤退に至る時期については、信夫清三郎『大正政治史』に概略があるものの、詳細な研究はほとんどなされていぬ。その意味で本書は、この時期のシベリアにおける革命及びそれに対する日本軍の対応を知るうえで有益であらう。

本書は七つの章とエピソードから成り、ウラディヴォストークにおける政変を軸にしてシベリアにおける革命の進行を詳細に叙述している。その政変の過程で成立し崩

壊していった各政権の実態を知ることがこの時期を理解するのに重要だからである。またこの過程における日本軍の動向にも注意している。

第一章は、オムスクのボルチャク政権崩壊からウラディヴォストークのロザノフ白色政権の崩壊(一九二〇年一月三十一日)までを扱う。第二章では、臨時ゼムストヴォ政府の成立と、日本軍による政府軍の武装解除の強行(四月四日)までの過程を述べる。第三章では、東部シベリア統一における臨時ゼムストヴォ政府の役割を扱う。なお、二〇年四月にウエルフネウディンスクで極東共和国が成立したこと、十一月にセミノフがチタから撤退したことは、この時期において注目すべき事件であつた。第四章では、二一年五月のメルクロフによるクーデター並びに臨時プリアムール(沿黒龍江)政府の成立について論じる。この反革命の背景には、日本軍の駐屯継続、白軍の沿海州集結、ロシアの政治情勢の流動化があつた。第五章はメルクロフ政権の失政を述べ、第六章では、白軍による冬季攻勢の開始とその敗北がメルクロフ政権に打撃となつたこと、そして第七章では、日本軍